

## 謡曲〈落葉〉小考

加藤 森 平

はじめに

謡曲〈落葉〉は『源氏物語』を典拠とする源氏能の一つで、朱雀院第二皇女の女二宮、落葉の宮をシテとする作品である。この〈落葉〉は金剛流の現行曲であるにも関わらず、これまで作品そのものについての研究がほとんどなされてこなかった。しかし『源氏物語』を典拠とする作品であること、また、〈落葉〉の詞章には中世の『源氏物語』梗概書、『源氏小鏡』からの影響が指摘されていることから、『源氏物語』や『源氏小鏡』との比較を通して謡曲の『源氏物語』享受の在り様が考察出来ると考えられ、十分に研究に値する作品であると言えよう。そこで本稿では、『源氏物語』から『源氏小鏡』、そして〈落葉〉に至るまでの落葉の宮像の変遷に着目して、それらの比較から〈落葉〉の主題について考察する。同時に、

〈落葉〉の構成や舞台設定にどのような効果があるのかについても考察する。また、後場の展開に類似性が指摘される謡曲〈定家〉との比較も行い、〈落葉〉の結末部に見られる落葉の宮と夕霧の關係性についても考察する。

### 一、研究史概観

本節では、謡曲〈落葉〉の主題解釈に関する研究史を概観する。

まず、注釈書として大和田建樹『謡曲評釈』<sup>①</sup>、野上豊一郎『解註謡曲全集』<sup>②</sup>がある。この二注釈書において〈落葉〉は落葉の宮から夕霧への執心を描いた曲と解釈された。

論文では西一祥と小田切文洋の「源氏物語と謡曲との交渉」<sup>③</sup>が管見の限りで〈落葉〉について言及された最も古いものである。ここでも〈落葉〉は「落葉の宮の夕霧への尽きせぬ慕情」が際立つ曲と

され、前の二注釈書と同様に落葉の宮から夕霧への執心を描いた曲として解されている。

このように〈落葉〉は長らく、落葉の宮から夕霧への執心を描いた曲として解されてきた。これに対して田口和夫は、〈落葉〉の詞章と『源氏物語』の梗概書『源氏小鏡』の記述との比較を行い、夕霧に対する落葉の宮の執心を表すとされてきた〈落葉〉を、夕霧を拒否しながら結ばれざるを得なかつた落葉の宮の状況を表した曲と読み替えた。さらに田口は、小野で落葉の宮に拒絶され山を下りる夕霧の心境が、『源氏小鏡』と比べ〈落葉〉によく表現されていることから、「拒否する女としての落葉の宮の心」こそが謡曲〈落葉〉の主題であると論じた。

しかし、その後三田村雅子は田口説を踏襲することなく、〈落葉〉の主題として、皇女でありながら男から軽んじられた恨みと、夕霧に惹かれ心を移してしまった後悔の念を読み出した。これは落葉の宮が夕霧に心を移したということを前提とする点で、大和田や野上らの解釈と同系統のものであると言える。こうした解釈の揺れを受け、外村南都子は〈落葉〉の主題について、「落葉の宮が夕霧の大將を慕ふ心を見せるもの」とする見方と「拒む女というテーマ」とする見方の二つがあるとまとめている。

謡曲〈落葉〉に触れた論文として直近に発表された石井倫子の

「変容する落葉宮——〈陀羅尼落葉〉試論——」<sup>⑦</sup>では、〈落葉〉の後場に死後も夕霧の妄執から逃れられない落葉の宮の苦しみを読み出した。この石井の論は、夕霧から落葉の宮への想いに重きを置く点で、田口と同じ系統であると言える。

以上、謡曲〈落葉〉に関するこれまでの言説を概観してきたことで、謡曲〈落葉〉研究の最大の論点は、その主題が「落葉の宮から夕霧への執心」か「夕霧から落葉の宮への執心」かという点であることが明らかになった。そこで次節では、『源氏物語』から『源氏小鏡』、そして謡曲〈落葉〉に至る落葉の宮像の変遷に着目し論証を行うことで、二つに分かれている〈落葉〉の主題の問題に筆者なりの結論を出したいと考える。

## 二、落葉の宮像の変遷と謡曲〈落葉〉の主題

本節では、『源氏物語』から謡曲〈落葉〉に至るまでの落葉の宮像の変遷について考察する。以下三項において『源氏物語』『源氏小鏡』〈落葉〉のそれぞれにおける落葉の宮に関する記述をまとめ、その比較を行うことで謡曲〈落葉〉における落葉の宮像、ひいては曲の主題を捉えたい。

## 二一、「源氏物語」における落葉の宮

本項では『源氏物語』における落葉の宮の記述を参考に、『源氏物語』における落葉の宮像を考察する。

『源氏物語』において落葉の宮が描かれるのは若菜下、柏木、横笛、夕霧、匂兵部卿、宿木の計六巻である。まず若菜下巻を見る。

ここでは柏木は落葉の宮と結婚するが、その後も女三宮に想い焦がれており落葉の宮への愛情は薄かったことが語られる。しかし病に倒れた柏木が療養のために親元に引き取られていく場面には、柏木の「今はと頼みなく聞かせたまはば、いと忍びて渡りたまひて御覽ぜよ。かならずまた対面たまはらむ」<sup>⑧</sup>（若菜下）という言葉に対して「宮は、とまりたまひて、言ふ方なく思しこがれたり」<sup>⑨</sup>（若菜下）と別れを悲しむ夫婦の姿が描かれる。この場面について鈴木裕子は「柏木が落葉の宮に思いのこもった言葉を語ったのはこのときが初めてではなかったか。いよいよ別離が訪れるときになって初めて夫の心に触れることができたのではなかったか」と述べ、ここで柏木と落葉の宮の心が通じ合ったと指摘している。

次に柏木巻を見る。ここでは柏木の死後、遺言で落葉の宮の身の回りの世話を託された夕霧が一条宮を訪問する。その様子は「もの悲しく、さぶらふ人々も鈍色にやつれつつ、さびしうつれづれなる昼つ方、前駆はなやかに追ふ音して」（柏木）に表れるように柏木

の死に沈む一条宮の暗い空気を払うかのようなものとして夕霧の訪問が肯定的に描かれる。

次に横笛巻を見る。ここでは夕霧と落葉の宮が、想夫恋の合奏をする場面が描かれる。この場面については宮川葉子が「合奏に応じた娘の心が夕霧を拒んでいない」<sup>⑩</sup>こと、鈴木が「落葉の宮にも夕霧へのほのかな好意が芽生え」ことをそれぞれ指摘するように、落葉の宮から夕霧への恋心が高まりつつある様子が読み取れる。

次に夕霧巻を見る。この巻で夕霧は小野に籠った落葉の宮を訪問し、御簾の内に侵入するという強引な行為に出るが、落葉の宮の頑なな拒絶を受け、契りを結ぶことのないまま朝を迎え帰っていく。この場面からは落葉の宮の夕霧に対する強い拒絶の意思が読み取れる。このように夕霧との間に関係を持つことを拒み通した落葉の宮だが、夕霧が小野に泊ったという事実から一条御息所は心を痛め、夕霧の気持ちを確かめようと文を書く。しかしその後夕霧の訪れは無く、それを憂えた御息所は病気が悪化し死亡する。落葉の宮は母の死を悲しみ出家を望むが、父朱雀院に止められ、落葉の宮は深い悲しみの中で出家することもかなわず、夕霧と結婚するしかない状況に陥っていくのである。その後夕霧によって無理に一条宮に連れ戻された落葉の宮は強引な形で初めて夕霧と契りを交わすこととなる。しかし事後には落葉の宮が夕霧の容姿について「限りもなう清

げなり」(夕霧)と感心するとともに、「かういみじう衰へにたるありさまを、しばしにても見忍びなんやと思ふもいみじう恥づかし」(夕霧)と自分の容貌の衰えから夕霧の心が自分から離れてしまうことを心配する落葉の宮の様子が描かれるなど、表面上は夕霧を遠ざけながら、無意識に夕霧に惹かれている落葉の宮の複雑な心中を見ることが出来る。

次に匂兵部卿卷を見る。ここでは落葉の宮と夕霧のその後が語られる。落葉の宮は夕霧によって六条院の夏の町に移され、夕霧は三条の邸の雲居雁と六条院の落葉の宮のもとに交代で通うようになり、夕霧との間に子供のいなかった落葉の宮はここに夕霧と藤典侍の子六の君を養女として迎える。

最後に宿木巻を見る。ここでは匂宮と六の君の結婚の際に、二人の仲を取り持つ文を贈るなど、六条院での落葉の宮が描かれ、鈴木が指摘するように「それなりに安泰」で「ごく平凡な女性としての「幸せ」な日常」を過ごす落葉の宮の姿が読み取れる。

以上、『源氏物語』において落葉の宮が登場する場面と、そこから読み取れる落葉の宮の心情を確認した。落葉の宮の心情については、鈴木が「その内面が語られることが少ない」ことから「寡黙な落葉の宮」と評するように、『源氏物語』本文における描写が少なく、読者の想像に委ねられる部分も多い。しかし詳細に見ていくこ

とで落葉の宮は、柏木に蔑ろにされた皇女という面、それでも柏木との別れに心を痛める柏木の妻としての面、夕霧を拒絶する面、夕霧に惹かれる面、夕霧の妻としての面、六の君の母としての面等、様々な面を持つ多面的な女性として描かれていることが分かる。

## 二二、『源氏小鏡』における落葉の宮

本項では『源氏小鏡』の落葉の宮に関する記述を確認し、『源氏物語』に描かれる落葉の宮との差異を明らかにすることで、『源氏小鏡』における落葉の宮像を考察する。

『源氏小鏡』で落葉の宮に関する記述が見られるのは若菜下、横笛、夕霧の計三巻である。まず若菜下巻を見る。ここでは落葉の宮の出自や降嫁の経緯が記される。また、柏木が女二の宮を落葉になぞらえて詠んだ歌が落葉の宮という名の由来であることも説明される。落葉の宮の谷姿について、「かたち事もなく、しめやか」(小鏡)であると褒めている点も注目される。

次に横笛巻を見る。ここでは夕霧が落葉の宮に想いを寄せ、しばしば一条の屋敷を訪れたことと、夕霧と落葉の宮が想夫恋の合奏をしたという記述が見られる。ここでは想夫恋の合奏が落葉の宮にとって「かたはらいた」(小鏡)きことであったと書かれている点が注目される。

最後に夕霧巻を見る。ここでは落葉の宮が、母一条御息所の療養のために小野の里に籠ったことが説明される。そしてそこに夕霧が訪ねてきて、霧深く帰れないと言いつけて小野に泊まったことが記される。夕霧の後朝の文に対して落葉の宮が返事を書かなかった場面には「いと、物うく、はつかしくおほしめて、かきたまはず」（小鏡）との記述があり、夕霧の宿泊が落葉の宮の本意ではなかったことが読み取れる。その後、夕霧と宮の関係を思い悩んだ末に一条御息所が死亡したこと、落葉の宮が夕霧によって京に迎えられたことが記述される。

以上、『源氏小鏡』における落葉の宮の記述を確認した。次に『源氏物語』と『源氏小鏡』における落葉の宮の描かれ方の違いを考察する。まず、『源氏物語』では六巻に亘って描かれていた落葉の宮の物語が『源氏小鏡』には三巻分しか記述が無い点に注目したい。『源氏小鏡』では『源氏物語』に見られる柏木との離別や夕霧の妻となった後のこと、六の君の母としての姿は描かれず、落葉の宮の名前の由来を除けば、落葉の宮に関する記述は柏木死後の夕霧の求愛のエピソードに集中しているのである。

また、『源氏小鏡』ではその少ない記述の中で、「かたはらいたけれどとも」「いと、物うく」「はつかしく」といった、落葉の宮の夕霧への嫌悪の感情を表す表現が散見される。これは『源氏物語』にお

いてほとんど内面が語られず、心情の大部分が読者の想像に委ねられていたのとは対照的である。

これら二点の違いからは、『源氏物語』では多様な面を持った女性として描かれた落葉の宮が、『源氏物語』においては横笛・夕霧巻の夕霧とのエピソードに焦点化され、さらに夕霧に対する否定的な心情描写がなされたことで、夕霧を拒絶する女性として強調されていることが分かる。つまり『源氏小鏡』では、本来落葉の宮に与えられていた多面性が取り払われ、夕霧を拒否する女性としての落葉の宮像が創出されているのである。

#### 二一三、謡曲〈落葉〉における落葉の宮と主題

本項では、〈落葉〉での落葉の宮の自分語りを手掛かりに、謡曲〈落葉〉において落葉の宮がどのように描かれているかを考える。

謡曲〈落葉〉における落葉の宮の自分語りは大きく二つに分けられる。以下、それぞれを見ると、一つ目は落葉の宮の名前の由来についてであるが、これは『源氏物語』『源氏小鏡』共に記述があり、落葉の宮という女性のアイデンティティに関わるエピソードであるため、落葉の宮を語る上で欠かせないものと考えられる。

二つ目は小野で夕霧を拒否した事件についてであり、これも『源氏物語』と『源氏小鏡』双方に見られる。ここで注目すべきは〈落

葉」における落ち葉の宮は、以上挙げた二つ以外の夕霧との初めての契りや六条院での生活などは語らないという点である。〈落葉〉本文には他に『源氏物語』横笛巻の「横笛の調べはことにかわらぬをむなくなりし音こそつきせぬ」(横笛)の歌が引かれているが、これも『源氏小鏡』に採られている場面である。

これらのことから謡曲〈落葉〉は『源氏小鏡』と同じく、『源氏物語』に見られる多面的な落葉の宮から「拒否する女」として限定化された落葉の宮像を有していると言える。〈落葉〉の詞章が『源氏小鏡』の影響を受けたものであることは田口も指摘したことであるが、『源氏物語』『源氏小鏡』〈落葉〉という三作品に描かれる落葉の宮を検討し、『源氏小鏡』と〈落葉〉における採録場面の一致を見ると、謡曲〈落葉〉への『源氏小鏡』の影響は単なる詞章の引用に止まらず、曲の根幹に関わる落葉の宮像の人物像にも及んでいる。つまり謡曲〈落葉〉は『源氏小鏡』から、『源氏物語』における多面的な落葉の宮から切り離された、夕霧を拒否する女性としての落葉の宮像を引き継いでいると考えられるのである。

以上の検証によって謡曲〈落葉〉における落葉の宮像が夕霧を拒否する女性として形作られていることが明らかになったことで、これまで二つの論が提示され、どちらか定まっていなかった〈落葉〉の主題が見えてくる。

これまで〈落葉〉の主題は、大和田らの唱える「落葉の宮から夕霧への執心」説と、田口が提唱した「夕霧から落葉の宮への執心」説に分かれていた。ただし田口が論拠としたのは『源氏小鏡』において「あかつき、かへり給ふ」(小鏡)とされている部分が〈落葉〉では「夜や暁になりぬらんと、大将は此の山をすごす」とわかれ出で給ふ」(落葉)となり、落葉の宮に拒絶された夕霧の心情が豊かに表現されているため、という少々曖昧なものであった。

しかし本稿において、謡曲〈落葉〉における落葉の宮について『源氏物語』『源氏小鏡』と比較しながら詳細な検討を行い、〈落葉〉において落葉の宮が「夕霧を拒否する女性」という面に焦点化されている事が明らかになったことで、「夕霧から落葉の宮への執心」を主題と捉える田口説はこれまでよりも明らかな論拠を得たと言える。謡曲〈落葉〉は『源氏小鏡』における落葉の宮像を継承し、夕霧を拒絶する落葉の宮像を用いているために、そこから掛け離れた、夕霧に想いを寄せる落葉の宮が曲の主題であるというのとは当たらないのである。以上から稿者は謡曲〈落葉〉を、「夕霧から落葉の宮への執心」を描いた曲だと結論付けたい。

### 二、謡曲〈落葉〉の主題と横笛詠

本節では謡曲〈落葉〉において印象的に詠われる、

横笛の、しらめはいとど、変らねど、空しくなりし音こそ尽き  
せね・音こそ尽させね音こそ尽させね（落葉）

という「横笛詠」について、この謡が曲の主題に及ぼす影響を考察する。この横笛詠について三田村は「横笛を愛し、横笛に執念を止めた柏木のことを想起させる。」と指摘する。さらに続けて、「この柏木遺愛の横笛を落葉宮は夕霧に譲ってしまうのだが、その行為自体が、柏木の思い出を裏切り、いつの間にか夕霧という男に惹かれ、心を移してしまった落葉宮のありようを示している」と論じる。これは一見、問題の無い論のようであるが、『源氏物語』における横笛が夕霧の手に渡る経緯を考えると、疑問を差し挟む余地がある。

そこで本節では、『源氏物語』『源氏小鏡』〈落葉〉のそれぞれを随時参照しながら、柏木遺愛の横笛が夕霧の手に渡った経緯と横笛詠の詠み手、そして落葉の宮による夕霧拒絶のエピソードの語りの後にこの歌を配置した謡曲〈落葉〉の構成という三つの観点から、謡曲〈落葉〉における横笛の意味に新たな解釈を導きたい。

### 三一、『源氏物語』における横笛

本項ではまず、『源氏物語』において横笛が夕霧の手に渡った経緯について確認する。三田村は前の引用部において、落葉の宮が夕霧に横笛を贈ったとしているが正確にはこれは『源氏物語』の内容

と異なっている。

この点については『源氏物語』横笛巻を見れば明らかである。横笛巻において実際に夕霧に横笛を贈っているのは落葉の宮の母一条御息所であり、そこに落葉の宮本人の意思は認められない。むしろこの贈り物は鈴木が「御息所に、夕霧の懸想心をうまく制御して一条の宮に惹き付けておきたいとの思いが全くなかったと言えようか」と指摘するように、夫の死で後見の無くなった娘を心配し、夕霧の想いを落葉の宮に惹きつけておきたいと願う一条御息所の思惑によるものと考えるべきだろう。その証拠に落葉の宮は、横笛が夕霧に贈られた後も小野の山荘で夕霧の侵入を受けた際最後まで夕霧を拒み通し、一条の屋敷に戻されてからも強引に契りを結ばれるまで夕霧に対する冷淡な態度を崩そうとしない。このように『源氏物語』の展開を踏まえると、横笛の移動に落葉の宮の気持ちの移りを重ねる三田村の論はいささか強引な読みと言えらるだろう。

### 三一、横笛詠の詠み手と〈落葉〉の構成

本項では『源氏物語』『源氏小鏡』〈落葉〉それぞれにおいて、横笛詠の詠み手が誰とされているかを検討し、〈落葉〉の曲構成の面から横笛詠が曲に与える影響について考察する。

まず横笛詠の詠み手について確認すると、『源氏物語』における

横笛詠は、夕霧が譲り受けた柏木遺愛の横笛を試し吹きした際の一条御息所の歌に対する返歌として位置付けられている。このため、『源氏物語』における横笛詠の詠み手は夕霧ということになる。『源氏小鏡』においても横笛詠は「うちよりの御うたに」<sup>④</sup>対して詠まれた歌として記述されており、横笛詠が夕霧の歌であることは変わ

ない。謡曲〈落葉〉では『源氏物語』や『源氏小鏡』のように横笛巻についてのエピソードが詳細に語られることはない。しかし、詞章中で横笛詠がシテの和歌として謡われることから、〈落葉〉における横笛詠の詠み手は、『源氏物語』や『源氏小鏡』とは違い、落葉の宮であると考えられる。この横笛詠の詠み手の落葉の宮への変更は〈落葉〉独自のものと言えるが、それでは〈落葉〉はこの独自性によって何を表現しているのか。次は横笛詠の詠み手の変更が曲全体に対してどのような意味を持っているかを考えたい。

詠み手変更の意味を探る上で注目したいのが、横笛詠が亡くなつてしまった柏木を偲ぶ歌であるという点である。〈落葉〉では、柏木を偲ぶ歌の詠み手を夕霧から落葉の宮に置き換えることによって、『源氏物語』や『源氏小鏡』においては夕霧が柏木を偲ぶ歌であった横笛詠を、落葉の宮が柏木を偲ぶ歌への歌意の読み替えを行っていると考えられる。ここにおいて、若くして死んだ柏木を偲び、柏木に想いを残す落葉の宮の姿が浮かび上がる。つまり謡曲〈落葉〉

は横笛詠の詠み手を本来の夕霧から落葉の宮に移すことで、単に夕霧を拒絶するだけの冷たい女性ではない、柏木を想うがゆえに夕霧を拒絶する女性としての落葉の宮像を創出しているのである。

最後に、謡曲〈落葉〉において横笛詠は落葉の宮による夕霧拒絶のエピソードの語りの後に謡われているという点についても考える。これは『源氏物語』や『源氏小鏡』における時間経過に逆行するものとなっており、『源氏物語』と『源氏小鏡』において横笛の歌が詠まれるのは横笛巻であり、落葉の宮が小野で夕霧を拒む夕霧巻より前の出来事として描かれているのに対し、〈落葉〉ではあえて『源氏物語』の展開に逆らつて、夕霧巻の内容の後に横笛詠を置き、舞と共に一曲のクライマックスとしているのである。こうした曲構成には横笛詠の想いを印象付けようとする意志が感じられる。そして横笛詠の想いとは本項で見てきたように、落葉の宮の柏木への想いなのである。

以上、「横笛詠」という視点から〈落葉〉を見ると、夕霧を拒絶した落葉の宮の、柏木への偲ぶ想いというもの、一曲の基底にあるということがわかる。つまり、謡曲〈落葉〉における横笛詠は、夕霧を拒絶するという物語の中であつて、その背後には落葉の宮の柏木への想いがあつたということを表現する役割を果たしているのである。



#### 四、謡曲〈落葉〉の舞台としての「小野」

本節では、謡曲〈落葉〉の舞台として設定されている「小野」について、作品の中でどのような意味を持っているか考えたい。

小野は『源氏物語』夕霧巻で一条御息所が病氣療養のために籠った場所であり、落葉の宮は母の付添いで一緒に籠ることになる。これは〈落葉〉においても同様で「この宮の御母物の氣にいたく悩みて、知る処ありとて落葉の宮ももるともに此の山里に住み給ひ」(落葉)とある。そして〈落葉〉では小野の山荘で落葉の宮が夕霧に激しく関係を迫られたという『源氏物語』夕霧巻前半部の出来事が述べられていく。この謡曲〈落葉〉の舞台として設定される小野がどのような性質の地であったかを確認することで、謡曲〈落葉〉の舞台設定の持つ意味を考察する。

『源氏物語』夕霧巻前半部における小野については、自然描写を読み解くことでその性質が明らかになる。上坂信男は夕霧巻の霧について「単なる叙景以上に、ことばをかえれば、天然自然の風物としての域を超えて、象徴的な意味を与えられている」とし、「夕霧の嘆息が霧と変じたかのような象徴的意味あい」<sup>15)</sup>を読み取った。根本智治は夕霧巻の自然描写について、「虫の音」「鹿の鳴く音」「滝の音」、これらが「ひとつに乱れて艶」であるという。様々な音が

統合化されて夕霧の美的興趣を一気に盛り上げている。がしかし、やはりこれが夕霧の恋情の盛り上がりにもみ奉仕するものであって、女の心への共感・架橋ということにつながっていないか<sup>16)</sup>と指摘している。

これらの指摘のように、『源氏物語』夕霧巻において夕霧の落葉の宮に対する恋心が高まり、夕霧の嘆息の表れである霧が立ち込める小野は、夕霧の心情が具現化した地ということが出来る。そして小野のこの性質は、謡曲〈落葉〉においても「籬の鹿も蟲の音も涙もよほす瀧の音、名のみ音無の瀧津波も」(落葉)という描写や落葉の宮に降りかかる「妄執の夕霧」(落葉)として受け継がれているのである。さらに、三田村が指摘するように<sup>17)</sup>〈落葉〉での小野は『源氏物語』での小野よりも奥まった地に設定されている。こうした設定によって、謡曲〈落葉〉における小野には、単に落葉の宮ゆかりの地というだけではなく、夕霧の執心をより強調し、夕霧の想いの中に捕われる落葉の宮の姿を表現する効果が生まれているのである。

#### 五、謡曲〈定家〉との比較

ここまで、『源氏物語』『源氏小鏡』との比較から謡曲〈落葉〉について考察してきたが、本節では少し視点を変えて、後場の類似性

が指摘される謡曲〈落葉〉と〈定家〉の二作品の比較を通して、〈落葉〉における落葉の宮と夕霧の関係を捉え、謡曲〈落葉〉の主題を考察する。

#### 五十一、謡曲〈定家〉について

謡曲〈定家〉は『源氏物語大綱』に見られる、式子内親王と隔てられた定家の執心が死後葛藤となって内親王の墓に這い纏わったという話を素材として作られている。この曲は定家の式子内親王への執心と式子内親王の葛藤の二つが主題とされ、曲の最後で一度定家の執心から解放された式子内親王が再び墓に還り葛に纏わりつかれる様から、式子内親王が成仏せず、元の状態に戻る円環構造になっていると捉えるのが通説である<sup>⑩</sup>。

この謡曲〈定家〉の後場で式子内親王の霊に葛藤が纏わりついて身動きを奪う様子は、石井の指摘通り〈落葉〉の後場において落葉の宮の周りに霧が立ち込め苦しめる様子によく似ている。ただし、『源氏物語大綱』に見える定家と式子内親王の恋は、後鳥羽院によって引き裂かれた恋であり、「是が非でも落葉宮を我が手中に収めようと執拗に迫る夕霧と外堀を埋められ次第に身動きが取れなくなっていく落葉宮に定家と式子内親王との関係を重ね合わせる」という石井の指摘は当たらない。〈落葉〉と〈定家〉の後場の類似性は

生前の落葉の宮と式子内親王、夕霧と定家という対応関係にあるのではなく、二人の女性が死後、それぞれ相手の男の執心によって苦しめられ、僧に救いを求める所にあると考えられる。次項からこの点について考えていく。

#### 五十二、共通点と相違点

本項では、〈落葉〉と〈定家〉の二作品について、その共通点と相違点を見ていく。まず共通点だが、〈落葉〉と〈定家〉の共通点は二点ある。一つ目は、シテが相手の男から強く愛された女性という点、つまりシテと相手の男の関係である。〈落葉〉のシテである落葉の宮はここまでも述べてきたように、夕霧から執拗に迫られた女性である。〈定家〉のシテの式子内親王も曲の素材として挙げられる『源氏物語大綱』では、後鳥羽院によって逢瀬を断られた定家が恋死にをし、葛となって式子内親王の墓に纏わりついたとされ、この物語からは定家の式子内親王への強い愛と執心が見て取れる。

共通点の二つ目は、シテを取り巻くように男の妄執が具現化するという妄執の現れ方である。謡曲〈落葉〉において妄執は霧となって現れる。謡曲の舞台である小野の地に立ち込め、落葉の宮の身に纏わりついて落葉の宮を苦しめる霧が『源氏物語』における夕霧の大将を象徴していることは前節で詳しく検討した通りである。こう

した妄執の現れ方は謡曲〈定家〉においても見られる。〈定家〉では詞章中にも語られるように、式子内親王の墓に纏わりつく葛が定家の式子内親王への執心を象徴し、僧の巾いによって墓から現れた式子内親王の霊も定家葛に身を締め付けられて苦しんでいる。このように、〈落葉〉と〈定家〉では共に、相手の男の執心が死後自然物として具現化し、女を苦しめているのである。

次に、相違点について確認する。これは両作品を比べれば明らかで、僧の御法を受けてシテが成仏するか、成仏しないかという点である。〈落葉〉では、僧の御法の後、霧に包まれ時雨の降っていた小野の山が晴れ渡り、落葉の散る音も消え、山風だけが吹いている描写があることから、落葉の宮が御法によつて成仏したと考えられる。それに対し、〈定家〉の結末は、円環構造と言われる通り、式子内親王の霊は僧の御法を受けて一度は定家葛から解放されるが、僧に感謝の舞を見せた後自ら墓に戻っていき、再び定家葛に絡み付かれて元の状態に回帰して終わるのである。

### 五―三、〈定家〉との比較から見た〈落葉〉

ここまで謡曲〈落葉〉と謡曲〈定家〉の二作品について、共通点と相違点を確認してきた。本項ではそれらを用いて、〈定家〉との比較から見た、謡曲〈落葉〉における落葉の宮と夕霧の関係について

て考えていく。

まず、〈落葉〉と〈定家〉は、生前に愛された男性の執心によつて成仏することが出来ない女性をシテとした曲という点で同じ趣向の作品であると言える。事実、僧が御法を説いて男の執念の象徴である〈定家〉の葛、〈落葉〉の霧から解放されるまではほぼ同じ経過をたどっている。しかし、前項の相違点で見たように、この二作品が最終的に行きつくところは対照的である。この違いが生じる原因を探ると、そこには定家と式子内親王の恋と、夕霧と落葉の宮の恋の性質の差が見て取れる。

定家と式子内親王の恋については、『源氏物語大綱』のような話が生みだされたように、当時の人々は定家と式子内親王を、相思相愛の仲であったと捉えていたと考えられる。こうした背景を踏まえて作られた謡曲〈定家〉では、西野が指摘するように「羞恥・苦悩から解放されたい、しかし恋するままにいたい」という式子内親王の留めがたい慕情、葛藤をも描いている」のであり、ここにおいて式子内親王は、定家の妄執に苦しめられ僧に救いを求めるものの、本心では定家の愛情の証でもある葛からの解放を望んでいないのである。つまり謡曲〈定家〉における二人の想いは、詞章の上では定家から式子内親王への執心が強調されるが、実は双方向的なものである。

このように謡曲〈定家〉は定家から式子内親王への妄執だけでなく、式子内親王から定家への執心をも意識して構成されていると言える。そして、だからこそ僧の御法によって定家の執心から解放された後、式子内親王は自らもとの墓に還り、再び定家葛に身を委ねる。お互いが想い合っているからこそ救われて成仏するよりも、苦しみながら二人でいることを選ぶのである。

では逆に、僧の回向を受けて女が成仏を果たす〈落葉〉の場合はどうだろうか。この場合、女を現世に縛り付けているのは男の執心だけだと考えられるのではないか。だからこそ僧の御法を受けて女は男の執心から解放され、晴れて成仏を果たした。すると謡曲〈落葉〉における夕霧と落葉の宮の恋は、夕霧から落葉の宮への一方向の愛だと言えるだろう。そこに〈定家〉のような落葉の宮から夕霧への執心が存在しないために、定家と二人で苦しみ続けることを選んだ式子内親王とは違い、僧の回向によって自身を現世に縛りつけていた夕霧の執心から解放され、無事に成仏して消えていったのであろう。この、シテが成仏を果たすという曲の結末部からも謡曲〈落葉〉が「夕霧の落葉に対する執心」を描いた作品であるということがわかるのである。

おわりに

本稿では、謡曲〈落葉〉の主題について、『源氏物語』と『源氏小鏡』、そして〈落葉〉という三作品の比較により謡曲における落葉の宮像を解明するという手法で考察するとともに、横笛詠と「小野」という舞台設定が作品にどのような効果をもたらしているかを考察した。また、謡曲〈定家〉との比較を通して謡曲〈落葉〉の読みを深めてきた。

その結果、『源氏物語』から謡曲に至る落葉の宮像の変化という点からは、『源氏小鏡』が『源氏物語』では多面的に描かれる落葉の宮から「夕霧を拒絶する落葉の宮」という面だけを切り取った落葉の宮像を造り出し、〈落葉〉もそれを引き継いでいることが分かり、そこから謡曲〈落葉〉においては「夕霧から落葉の宮への執心」が描かれていると結論付けた。

また、横笛詠についての考察では、本来は夕霧が柏木を偲んで詠んだ歌である横笛詠が、謡曲においてはシテによって謡われることで落葉の宮から柏木への想いが付与され、『源氏小鏡』における落葉の宮像ともまた違う、柏木を想いながら夕霧を拒絶するという謡曲独自の落葉の宮像が創出されていることが明らかになった。

他に、謡曲〈定家〉との比較においては、夕霧の執心から解き放

たれた落葉の宮が何の未練も残さず成仏し消えていくという結末部に着目することで、〈落葉〉における夕霧と落葉の宮の関係が、夕霧から落葉の宮への一方的な愛情として描かれていることが明らかとなり、謡曲〈落葉〉が「落葉の宮から夕霧への執心」を描いた作品ではないという主張に別角度からの補強を行うことが出来た。

謡曲〈落葉〉は「落葉の宮から夕霧への執心」を描いた作品ではなく、「夕霧から落葉の宮への執心」を描いている。また、落葉の宮の人物像という観点から見ると、謡曲〈落葉〉は『源氏物語』における落葉の宮像を単純に踏襲した作品ではなく、亡き夫柏木に想いを残し続けた女性という新たな落葉の宮像を造り出した作品なのである。

注

- ① 大和田建樹校注『謡曲評釋』（博文館、一九〇七年）。
- ② 野上豊一郎『解註謡曲全集』（中央公論社、一九三五年）。
- ③ 西一祥／小田切文洋『源氏物語と謡曲との交渉』（日本大学文学学部（三島）研究年報 人文・社会科学編 第二十七号、一九七九年二月）。
- ④ 田口和夫『汲水閑話』六十三 拒む女（落葉）——『源氏小鏡』から——（『能楽タイムズ』第四八九号、一九九二年二月）。
- ⑤ 三田村雅子『源氏能の女たち』（『国立能楽堂』第一九九号、二〇〇〇年三月）。
- ⑥ 外村南都子『能の世界と源氏物語』（増田繁夫他編『源氏物語研究集

- 成 第十四巻 源氏物語享受史 風間書房、二〇〇〇年。
- ⑦ 石井倫子「寛容する落葉宮——（陀羅尼落葉）試論——」（『国語と国文学』第八五巻第三号、二〇〇八年三月）。
- ⑧ 阿部秋生／秋山虔他校註・訳 新編日本古典文学全集23『源氏物語』（小学館、一九九六年）より引用。以下、『源氏物語』若菜下、柏木横笛、夕霧巻の本文引用は同書による。
- ⑨ 鈴木裕子「（母と娘）の物語——一条御息所と落葉の宮——」（『古代中世文学論考刊行会編『古代中世文学論考 第八集』新典社、二〇〇二年）。
- ⑩ 宮川葉子「落葉宮」（今井卓爾編『源氏物語講座第二巻 物語を織りなす人々』勉誠社、一九九一年）。
- ⑪ 引用は岩坪健編『源氏小鏡』諸本集成』（和泉書院、二〇〇五年）所収の第一類京都大学本（伝持明院基春筆）による。以下、『源氏小鏡』の本文引用はこれに準ずる。
- ⑫ 注⑤参照。
- ⑬ 注⑨参照。
- ⑭ 傍点は稿者による。
- ⑮ 上坂信男「小野の霧・宇治の霧——源氏物語心象研究断章——」（『言語と文芸』第六一号、一九六八年二月）。
- ⑯ 根本智治「夕霧巻前半部の語り口——夕霧と落葉の宮の恋の特質——」（『信州短期大学研究紀要』第一〇巻第一・二号、一九九八年二月）。
- ⑰ 三田村は注五論文中で「夕霧巻で彼女が一時籠もっていた里近い小野の地（原作では浮舟の住んだ小野里の方が山深いとある）よりもはるか山深い、蛆路を伝った奥まった隠れの場所に能の落葉宮の旧跡が設定されているのも印象深い」として謡曲〈落葉〉における小野の山深さに

ついで言及している。

⑱ 石井は注七論文中で「死後もなお夕霧の妄執から逃れることのできな  
い落葉の宮の苦しみが描写され、あたかも〈定家〉の後場を髣髴とさせ  
るような趣」として、謡曲〈落葉〉と〈定家〉の後場の類似性を指摘し  
ている。

⑲ 西野春雄校注 新日本古典文学大系『謡曲百番』（岩波書店、一九九  
八年）解説による。この説に対して田中成行は「謡曲「定家」と歎喜  
天信仰」〔梁塵 研究と資料』第一四号、一九九六年一月）において、  
定家葛が式子内親王の墓に纏わりつく姿を定家の執心ではなく、その姿  
が仏神そのもので救いであると論じる。しかし式子内親王の霊が弔いを  
求めて僧のもとに現れること、苦しみを救うよう僧に願うことなどから  
式子内親王が定家の執心によって成仏できずにいる様子が読みとれるた  
め、本稿では通説に則る。